

イスラム世界の成立

- 六信五柱 イスラム教徒が何を信じ、いかなる行為によって神に仕えるかは、信仰内容と儀式を箇条化した「六信五柱」によく示されている。六信とは、(1) 唯一絶対の神アッラー、(2) 天使、(3) 啓典、(4) 預言者、(5) 来世、(6) 予定の6つを信じることで、五柱（五行ともいう）とは、(1) 信仰告白、(2) 礼拝、(3) 喜捨、(4) 断食 (5) 巡礼の5つを行うことである。啓典は「コーラン」だけでなく、同じく神の啓示として下された「旧約聖書」と「新約聖書」を含むが、「コーラン」は、これに先立つ啓示の誤りを正したものとされる。預言者にもユダヤ教・キリスト教のすべての預言者が含まれるが、ムハンマドは神が人類に遣わした最後の預言者で、ムハンマドなきあと、神の啓示が人類に下されることはないと言われる。信仰告白は、「神は唯一で、ムハンマドは神の使徒（預言者）である」と唱える。この言葉に、ユダヤ教・キリスト教と違うイスラム教の特徴がはっきりと示されている。

アラビヤ半島のメッカに生まれた預言者ムハンマドは、唯一の神アッラーへの絶体的服従を説くイスラム教を創唱した。彼の教えに従うアラブ人は大規模な征服を行い、イベリア半島から、中央アジアにまたがる大帝国を建設した。この大帝国は、最初のうちアラブ人の征服王朝の性格が強かったが、征服地の住民のイスラム教への改宗が進むと、法の前での信者の平等が達成され、しだいにイスラム法の支配する世界になっていった。これがすなわちイスラム世界である。

- 610 ムハンマド、イスラム教創始
- 622 ヒジュラ（ヘジラ）
- 711 イベリア半島の征服 ～714
- 732 トゥール・ポワティエの戦い
- 766 バグダート建設完成
- 830頃 ギリシア語文献の翻訳開始
- 969 ファーティマ朝、カイロ建設
- 1055 セルジューク朝、バグダート入城
- 1099 十字軍、エルサレム王国建設
- 1175 ゴール朝、インド征服開始
- 1216 チンギス=ハンの西征
- 1256 モンゴル軍、バグダート攻略

- 1357 オスマン帝国、バルカンに進出
- 1402 アンカラの戦い
- 1453 ビザンチン帝国の滅亡
- 1492 グラナダ陥落

1 預言者ムハンマド（マホメット）

アラビア半島の紅海沿いに、細長い山脈が南北に走っているが、この山脈の中ほどの小さな盆地にメッカの町がある。メッカは、南アラビアの商人が特産品の乳香を地中海世界に運んだ通商路の要地で、また偶像を祭る多神教の神殿カーバがあつて、毎年多くの巡礼者がメッカに集まり、その機会に市も開かれていた。5世紀の末ごろメッカに住みついたクライシュ部族は、南はイエメン、北はシリアに至る遠隔地通商を始めた。ビザンツ帝国とササン朝ペルシアが絶え間ない戦争状態に陥った6世紀の半ば以後、メッカ商人は、アラビア半島を経由することになった東西貿易を、半島内部で独占するようになった。しかし貿易独占によって大きな利潤をあげたのは、少数の大商人階級に限られ、クライシュ部族民のあいだに貧富の差が広がった。

もともと商業は、商人個人の判断と責任で行われる。そのため、メッカの町に個人主義的な傾向が強まり、少数の大商人階級が利潤の追求に熱中して同胞の困窮者を顧みなかっただけでなく、富と権力を人生の理想とする気風がクライシュ部族民全体に広まった。

クライシュ部族のハーシム家に生まれ、孤児として不幸な前半生を送った商人ムハンマド（マホメット）は、このような気風の広まりを、クライシュ部族民の精神の病とみなした。宗教だけが精神の病をいやしうるであろうが、当時のアラブ人の伝統的な多神教は、ほとんど迷信と変わらないものまでに墮落していた。彼は610年に唯一神アッラーの啓示を受けて預言者であると自覚し、アッラーへの絶対的服従を同胞に説き始めた。これがイスラム教の創唱で、ムハンマドは絶対者へのおそれの念によって、人々の精神の病をいやそうとしたのである。従ってイスラム教は最も厳格な一神教で、鋭く偶像崇拜を非難する。ムハンマドの没するまで、アッラーの啓示は彼に下り続け、7世紀の半ばにこれを一冊の書物にまとめたのが「コーラン」である。

ムハンマドが大商人階級の利己主義を攻撃したことから、ウマイヤ家を中心とする大商人から迫害され、622年、ムハンマドは少数のムスリム（イスラム教徒）を連れてメディナへヒジュラ（移住）を行なった。メディナの人々は、宗教・政治の両面にわたるムハンマドの指導を受け入れ、アッラーを究極の主権

者、預言者ムハンマドをその地上における代理人と認めるムスリムの共同体が、メディナに建設された。ムハンマドは、この共同体の人々を率いてメッカを征服し、メッカのカーバをイスラム教の至高の神殿にするとともに、カーバへの礼拝と巡礼をムスリムに義務づけた。多神教の神殿をイスラム教の神殿とするに当たっては、これをアッラーの館とする新たな意義づけが行われた。

ムハンマドはメッカ征服後もメディナにとどまり、没後はここに葬られたことから、メディナはメッカに次ぐイスラム教の第二の聖都とされた。ムハンマドの威信の高まりとともに、彼の教えに従うものがメッカ・メディナ以外にも現われ、632年に彼が没したとき、メディナの共同体を盟主とする地域・部族のゆるやかな連合体が、アラビア半島の広い範囲にわたって成立していた。

2 正統カリフとウマイヤ朝

ムハンマドの死の翌日、メディナのムスリムの共同体は、仲間のうちの長老アブー＝バクルを新しい指導者に選出した。彼はこのときカリフという称号を帯び、カリフ制度が成立した。カリフはムハンマドの代理ないし後継者を意味するが、イスラムの教義ではムハンマドのあとに預言者はないので、カリフはムハンマドが併せ持った宗教・政治両権限のうち政治的権限だけを継承したとされ、教義の決定権と立法権とからなる宗教的権限をカリフに認めない。

アラブ人ムスリムはアブー＝バクルの指導のもとに、アラビア半島以外の征服を始めた。征服の速度は早く、ほぼ7世紀の半ばまでに、東は現在のイランとアフガニスタンの大部分、西はリビアのシドラ湾東海岸、北はコーカサス・タウルス両山脈に至る広大な地が、メディナのカリフ政権の支配に帰した。征服地には征服の基地および行政の中心となる都市が築かれ、多数のアラブ人が住みついた。従って征服は同時にアラブ人の大規模な民族移動を意味し、これらの都市を中心に、征服地の住民のアラブ化とイスラム化が進んだ。

アブー＝バクルら、第4代カリフのアリーまでの4人のカリフを正統カリフという。正統カリフ時代は、アリーの子の暗殺に至るいたましい内乱によって終わりを告げ、ウマイヤ家のムアーウィヤは、ダマスクスに拠ってウマイヤ朝を開いた。ウマイヤ朝の成立と、特にムアーウィヤから2代にわたってカリフの位が父子相続されたことは、かつてメッカでムハンマドを迫害した勢力の復活と受けとられた。またダマスクスが首都となったことは、二聖都メッカとメディナの人々の自尊心を傷つけた。このため再び内乱がおこったが、反ウマイヤ朝勢力の統一はならず、ムアーウィヤとは別系統のウマイヤ家のカリフが内乱を鎮め、ウマイヤ朝の支配は続けられた。

内乱の平定後ウマイヤ朝は征服を再開し、東方では中央アジアとインド、西方では大西洋に至る北アフリカの細長い地中海岸の帯状の地が征服された。北

アフリカのベルベル人は、最初アラブ人の支配に抵抗していたが、やがてベルベル人のイスラム化は進み、アラブ人とベルベル人の連合軍は 711 年にイベリア半島に進出し、この地の西ゴート王国を滅ぼした。その後、フランク王国領に遠征して略奪を行っていたが、732 年のトゥール・ポワティエ間の戦いに敗れると、ピレネー山脈の南に退いた。

3 イスラム帝国としてのアッバース朝

正統カリフとウマイヤ朝時代の政治の特徴は、アラブ人による征服地の異民族支配にあり、アラブ人は征服者・支配者集団として、多くの特権をほしいままにしていた。多くの特権のうち特に著しいのは事実上の免税特権で、地租（ハラージュ）と人頭税（ジズヤ）からなる重税は征服地の住民だけに課せられ、たとえ彼等が改宗してムスリムになっても、この重税を免れることはできなかった。

「コーラン」は神の前での信者の平等を説く。征服地の新改宗者は、このような差別を「コーラン」の教えに背くと考えた。また、7 世紀の末ごろからイスラムの教義とおきての研究が進むと、アラブ人の中にも、ウマイヤ朝の政治を「コーラン」の教えに照らして非難するものが現われ始めた。そもそもウマイヤ家は、メッカでムハンマド迫害の先頭に立ったのではないか。ムハンマドの叔父の子孫で、従ってハーシム家に属したアッバース家は、このような気運に乗じて革命運動をおこし、これが成功して 750 年に、ウマイヤ朝が倒れてアッバース朝が開かれた。

アッバース朝は二聖都もダマスクスも避け、当時農業生産力が最も高く、従って租税収入の最も多かった南イラクの中心に、新首都バグダードを築いた。イラン人を主とする新改宗者の知識人の多くが帝国の要職に就けられ、カリフの政務を補佐する宰相の統率する官僚制度が発達し、行政組織の中央集権化が進んだ。アラブ人の特権も徐々に廃止され、アラブ人であろうとなかろうと、征服地に土地を所有するムスリムには地租が課せられ、他方すべてのムスリムから人頭税が免除されるという、イスラム租税制度の大原則が確立された。

正統カリフ時代末期の内乱でアリーを支持し、アリーの暗殺後は、彼の子孫が宗教・政治の両権限を握るムスリムの最高指導者でなければならないと信じる人々を、シーア派という。アッバース家は、シーア派の援助も受けて革命に成功したが、アッバース朝成立後はシーア派を弾圧した。シーア派も抵抗を試みたが、ムスリム全体の中では圧倒的に少数であったため、アッバース朝政権を揺るがすことはできなかった。

7 世紀の末ごろに始められたイスラム教義とおきての研究は、アッバース朝になると神学と法学に発展し、神学者と法学者は、多数のムスリムに受けいれら

れるイスラムの教義と法の体系化に努めた。少数派のシーア派に対して多数派をスンナ派というが、アッバース朝第5代カリフのハールーン＝アッラシードの時代に、教義の決定権と立法権とをスンナ派の神学者と法学者に委ね、多数派ムスリムの信仰の擁護とイスラム法の施行をカリフの最も重要な職責とする体制が築かれた。正統カリフ・ウマイヤ朝のアラブ帝国は、アッバース朝のイスラム帝国へ発展した。

アッバース朝の初め長く平和が続いたことは、質の良い貨幣の十分な供給とあいまって、帝国諸地域間の自由な商品の流通をうながした。進取の気性に富むムスリム商人は、イスラム世界以外の地にも取引きに出かけた。遠隔地通商には隊商貿易と商船貿易とがあり、これを組織したのは都市に住む大商人であった。商人はまた、官僚・知識階級と並んでイスラム文明の担い手であった。イスラム文明は、アラブ人のもたらしたアラビア語とイスラム教を縦糸、征服地の住民が祖先から受け継いだ先進文明の文化遺産を横糸として織りなした新しい融合文明であった。ウマイヤ朝時代には、融合の成果はエルサレムの岩のドームなどの建造物に認められるにすぎない。9世紀にギリシア語の文献がアラビア語に組織的に翻訳され始めると、医学・天文学・数学・錬金術など高度の学問が発達した。インドの医学と天文学も伝えられ、特にムスリムがインド人から学んだ算用数学、十進法、ゼロの概念は、のちヨーロッパに伝えられて近代科学の発達に貢献した。ムスリムはまたギリシアの哲学を学び、スンナ派の神学者は厳密な哲学の用語と方法論とを採りいれて、合理的な客観的な神学大系の樹立に成功した。